2021/05/30　七里教会　　最上光宏

「主にある交わり」　　使徒言行録 2:37-47

先週、私たちは「ペンテコステ」の礼拝をご一緒に守りました。「五旬祭」と呼ばれるこの日、弟子たちが集まって祈っていたところに聖霊が降り、彼らの心が熱く燃やされ、大胆に力強く神の言葉を語り出した、記念すべき日でした。今まで隠れ家に身をひそめて、人前で、イエス・キリストについて語ることさえ出来なかった弟子たちが、別人のように、大勢の人々の前で公然と語りだしたのです。そのこと自体、驚くべきことでしたが、彼らの語った言葉が、諸外国から来ていた多くの人々に通じ、彼らがそれぞれ自分の生まれ故郷の言葉で、弟子たちの語る「神の偉大なみ業」について聞き、それを理解することが出来た、というのです。これこそ、不思議な神の御業としか言いようがありません。

聖霊は、活ける神の霊であり、また天に昇られたイエス・キリストの霊でもあります。弟子たちは、この霊の力を受けて、すべての民に「神の国の福音」を宣べ伝える者として、新たに立てられたのです。

使徒言行録 2 章 12 節を見ると、この弟子たちの大きな変化に「人々は皆、驚き、とまどい、『いったい、これはどういうことなのか』と互いに言った」と記されています。この驚きは、当然のことです。「聖霊」は、私たちの力や思いを越えて、風のように自由に、働く神の力なのです。

周囲にいる人々の中には、弟子たちの大胆な力強い語りぶりに、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」とあざける人もいたようです。そこで、ペトロが、11 人の弟子たちと共に立って、声を張り上げて語った言葉が、2 章の 14 節から 36 節までの所に記されているのです。

そのペトロの説教は、「私たちは、酒に酔っているのではない。旧約の予言者ヨエルの言葉にもあるように、神の霊を受けて、神の御業について語ったのだ」と前おきして、「イエス・キリストは、神から遣わされた方で、あなたがたを救うためにこの世に来られた。それなのに、あなた方はその方を十字架につけて殺してしまった。しかし神は、このイエスを死の苦しみから解放し、復活させられた。それはダビデが、詩編の中で『彼は陰府(よみ)に捨て置かれず、その体は朽ち果てることがない』(16:10)と詠っている通りなのだ」と語り、最後に「あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシア(救い主)となさったのです」と語ったのです。

これは、ペトロの、使徒としての最初の説教です。あの小心で 3 度も主イエスを知らないと否んだペトロが、ここでこのように大勢の人々の前で、堂々と「イエスこそ主である」と告白し、人々の心に迫る言葉を語ったこと自体、神の霊、聖霊の不思議な力によるものです。

今日の 37 節以下には、これを聞いた多くの人々の反応が次のようにしるされています。「人々はこれを聞いて大いに心打たれ、ペトロとほかの使徒たちに、『兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか』と言った」。

「わたしたちはどうしたらよいのか」。この問いは、イエス・キリストの十字架の死

に対して、人々がそれを「人ごと」としてではなく、「わたしの責任」として自覚したということです。彼らは、直接イエスさまを十字架に引き渡したり、はりつけに関わったわけではありません。しかし彼らは、ペトロの説教を聞くうちに、イエス・キリストはこの「わたしのために」、苦しみを受けて、十字架の死を担われたのだと、悟り、主イエスの十字架の死に、この「わたし」も責任があると悟ったのです。

イエス・キリストの苦難と十字架の死は、歴史的事実として、だれでも認めることができることがらです。それは、信仰がなくても、分かることです。けれども、その出来事が、「この私の罪のため」のものと悟ることは、聖霊の働きによることです。「聖霊によらなければ誰もイエスを主と告白することは出来ない」からです。その意味で、私たちが、十字架と復活の主を信じていること自体、すでに聖霊を受けている徴なのです。

「わたしたちはどうしたらよいのですか」。この問いに答えてペトロは語りました。「悔い改めて、めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば賜物として、聖霊を受けます。」

「悔い改める」ということは、方向転換することです。自分を頼りとして、自分中心に生きてきた生き方を変えて、キリストに向かって、すべてを主にゆだねて、主に従って歩むことです。「洗礼」(バプテスマ)とは、そのように生きる向きを変えて、古い自分に死んで、新しくキリストと共に生きるということです。バプテスマのヨハネの授けていた洗礼は、「水による悔い改めのバプテスマ」でしたが、キリストの名によるバプテスマは「水と霊によるバプテスマ」であり、「罪の赦しのバプテスマ」なのです。

ペトロは、このほかにもいろいろな話をし、「邪悪なこの時代から救われなさい」と勧め、この日 3 千人もの人々が洗礼を受け、仲間に加わったというのです。一日に 3 千人もの改宗者が与えられたとは、驚きです。強勢不振、教会員の減少に悩む私たちにとって、夢のような話ですが、考えてみると、わずか 12 人の弟子たちからなる小さな群れから、世界中にキリスト教が広まり、世界の各地に主の教会が誕生し、今なお、それぞれの教会を通して、主の大いなる御業が語り伝えられていること自体、不思議な神さまの御業であり、聖霊の導きだと思います。聖霊は、決して過ぎ去った過去のものではなく、今もなお生きて働いている神の力なのです。

このようにして、このペンテコステの聖霊の降臨の出来事を通して、多くのキリストを信じる者の群れが誕生したわけです。その意味で、ペンテコステは、「教会の誕生日」とも呼ばれます。しかし、それは単に多くの改宗者が与えられた、というだけの理由によるのではありません。

42 節には、「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」とあります。その改宗者たちが、弟子たちと共に礼拝を守り、「使徒の教え」つまりみ言葉の説教に耳を傾け、「パン裂き」今の聖餐式にあずかり、共に祈り、主にある交わりを大切にした、ということです。これが「教会」の姿なのです。

「教会」は、単に信仰を同じくする者たちの社交的な集まり、「仲良しクラブ」のような集まりではありません。この礼拝と祈りの共同体なのです。礼拝と祈りこそが、教会の生命なのです。最初の教会は、何よりもそのことを大切にしたのです。そして、それが初代教会のすべての活動の原動力であったのです。

43 節には、「すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業としるしが行われていた」とあります。ここに記されている「恐れ」とは、恐怖ではなく、神さまに対する畏敬の思いであり、打ち砕かれた謙虚な思いで、神と人とに仕え、他者に対する癒しと奉仕の業を通して、神の愛と力とを証しした、ということでしょう。

そして、さらに興味深いのは、44 節以下に記されているように、「信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおの必要に応じて、皆がそれを分け合った」ということです。ここには、実に麗しい信徒の交わりが形成された様子が描かれています。この財産や持ち物を共有して、必要に応じて分け合うという、共同生活は、しばしば「原始共産制」などと呼ばれることがありますが、これは、決して制度というような、強制されるようなものではなく、自由な喜びをもって、互いに持ち物をもちより、互いに分かち合うという自然な愛の交わりとして始まったようです。

この分かち合いの共同生活は、この後、5 章で、アナニアとサフィラという夫妻が自分の土地を売った代金の一部をごまかして、これが全部だと偽ったことから、夫婦とも神に裁かれた、という事件に見られるように、長くは続かなかったようですが、この互いに分かち合い、持ち物を共有するという精神は、主にある交わりの一つの理想的な姿として常に追い求められてきた「主にある交わり」の姿でした。

礼拝と祈りによって結ばれた主にある家族としての交わりは、単に抽象的な理念としてではなく、具体的な生活面においても生かされ、貧しく困窮するものが一人もないように、という配慮が、後々の教会においても大切にされてきたということは、大変意義深いことでした。

さらに、この主にある交わりは、単に教会の内部だけに限られたものではなく、教会の周辺や周囲に対する奉仕の業として展開されていったところに、初代教会の特色がありました。　今でこそ、生活保護や貧しい人々への救済処置、社会福祉や医療に関する生活保障が、国や地方自治体の責任においてなされるようになりましたが、そのよう制度が出来るまでは、互いに助け合い、共に生きるという交わりは、教会が行ってきたのです。

私が以前仕えていた弘前教会の歴史を紐解いてみると、津軽地方の飢饉に際して、教会が救援物資を集めて、貧しい農村に物資を届けたり、毎年夏に、医学部の学生や、看護学生たちが医療班を作って無医村を回って無料の診療活動をしたなどが載っていました。災害などボランティア活動も、教会から始まったものでした。そして、そういう活動が、教会が地域から信頼され、地域に根を下ろす結果を生んだのです。

ペンテコステを機に、エルサレムに誕生した最初の教会も、そのようにみんなが、心を一つにして、主に仕え、喜びと真心をもって、共に助け合い、主にある交わりの輪を広げていったのです。そのような最初の教会の姿が 47 節に、「民衆全体から好意を寄せられた」と記されています。この「好意を寄せる」という言葉は、「魅力がある」という意味の言葉で、人々の心を強く引き付けたということです。そして、その結果として、「こうして、主は救われる人々を、日々仲間に加え、一つにされたのである」と結ばれているのです。

教会は、この世にあって、「地の塩」「世の光」として、本来、人々が「好意を寄せる」

ような「魅力ある」ものなのです。みんなが聖霊に満たされ、喜びと感謝とをもって共に礼拝し、祈りを合わせ、主にある交わりを保ちつつ、共にこの世に仕えていくとき、そこに「神の国」が映し出されるのです。

今は、コロナ禍の中で、さまざまな制約があり、自由が妨げられていますが、共に礼拝と祈りを熱くし、主にある絆を深め、来るべき新しき時に向けて、備えをする時ではないか、と思います。　ルカによる福音書 12 章で、主イエスは弟子たちに言われたことがあります。「小さき群れよ、恐れるな、あなた方の父は、喜んで神の国をくださる」(12:32)と。聖霊の働きを信じて、祈りつつ神の国を待ち望みたいと思います。

アーメン